

雨水

第36号

银杏会

平成30年10月23日発行



等々力 水の流れ 溪谷

気温が40度を超えた街の様子です…七月の半ばからこんなTV放送がいくつか出た。暑さを避け戸外で活動できる場所・等々力溪谷の流水について調べました。



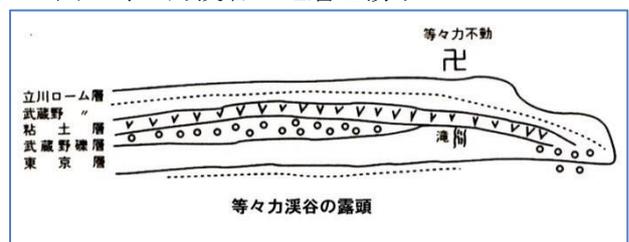
8月5日の朝9時、溪谷入口で区の案内看板(1図)を念入りに読んだ。ゴルフ橋を降りると谷沢川の流水が橋下を流れている。谷沢川の一部である等々力溪谷はゴルフ橋付近から始まり下流の矢川橋まで続く。

2図 等々力溪谷の始まり(ゴルフ橋)



◎等々力溪谷の地層

3図 等々力溪谷の地層と湧水



雨水は、水が浸透しやすい表土から武蔵野礫層まで浸み込んで、水が浸透しにくい東京層に突き当たるとその地層の上を移動してやがて湧水となって溪谷の崖線から落ちていく。湧水が流れ出る場所は33カ所余り数えられている。

上流のゴルフ橋の下ではかつては流水に生活用水が入り込んで白い泡が浮いていたが、

環境管理が徹底してきたため今では濁りも少なく又下流に行くにしたがって溪谷の兩岸から湧水が落ち込み、これから向かう**不動の滝**前を通過する頃にはさらに澄んだ水となっていく。川沿いの歩道を先へ進んだ。

◎溪谷橋近くの湧水池

4 図 湧水が落ち込んで出来た池



湧水池には湿生植物が点々とみられる。左奥の植物は**セキショウ(石菖)**で菖蒲の一種だがこの溪谷の中ではよく見かける。溪谷の斜面や台地には**シラカシ**、**ケヤキ**、**ムクノキ**、**コナラ**などの樹木が流れの上まで覆いかぶさるように繁り、鬱蒼とした雰囲気になっている。さらに下流に進む。

5 図 三号横穴墳墓



◎横穴墳墓

進行方向にむかって左斜面に広場がある。その奥の斜面にそれぞれ一号、二号、三号

墳墓の石碑が立っていた。このうち**三号横穴墳墓**は石室、羨道がある典型的な横穴墓の形を残していた。

墓の入口はガラスの蓋でふさがれていて、墓の中の内部を常時見ることができるよう照明をつけている。暗い場所だけにガラスに光線が反射しているのを見ると、古墳時代の墳墓と現在のガラス 電気が同居、異様な感じがした。出土品の内容から古墳時代から奈良時代に住んでいた有力者の墳墓と推定されている。更に下流に向かう。川の左側に溪谷の中心である**不動の滝**がある。

◎不動の滝

6 図 不動の滝の流水



不動の滝は「12万5千年前の海進がピークを迎えた頃は海であった」ということである。その地層がハッキリと観察できた。すぐ上流にあるローム層、礫層等と合わせて貴重な地層の観察場所となっている。竜の頭をした二か所ある噴水口から湧水が流れ落ちている。江戸時代から今でも**不動尊**の信者が流水に打たれて身を清めるのに使っている場所である。

滝の真向いの斜面に**稚児大師御影堂**(次ページ7図)がある。**稚児大師**とは弘法大師の幼いころの呼び名で、御堂の横にはお参りする人が口と手を清めるために使う船形をした石槽が設置してあった。

25年前頃にはこのように立派なもので

はなかったと記憶しているが、当時街の老人が湧水を水桶に何個もくみ取っていた。

7図 稚児大師御影堂



「この水でお茶やコーヒーを沸かすと水道とは違ったおいしいお茶を飲むことができます」ということであった。今は立て札に「飲む場合は煮沸してください」と書いてある。時がたったのを実感。

御影堂のある場所を降り、更に下流に向かう。右に日本庭園の門があり、その前を谷沢川が川幅を狭めて流れていく。

8図 日本庭園前を流れる谷沢川



日本庭園の門前を流れる谷沢川の左手背後にある森は図面で見ると等々力不動の明王院、地蔵堂がある丘にあたる。

この時 時節外れのウグイスの鳴き声があった。渓谷の中ではこの丘はかなり自然の状態のままで管理されているのだろう。一方の谷沢川の方でもこの辺りは川底が浅く砂利や川藻が沢山見られ、川向うの岸辺

は藪が覆いかぶさっている。

国分寺崖線の岡本民家園、みついの森と雰囲気が似ているところからホタルの幼虫が餌にするカイエナ等が住んでいて、時期になるとホタルが飛び交う溪流はこの辺りではないかと勝手に想像した。下っていくと矢川橋に出会った。渓谷最南端に来た。

9図 ポンプアップした流水を丸子川に流し込む



谷沢川はここで丸子川と上下にクロスする。ここで谷沢川の流水の一部は真っ直ぐに流れ多摩川に合流し、また一部はポンプアップされた後丸子川に落とされ六郷土手まで流れた後多摩川に合流していく。

これで、渓谷の流れに沿った湧水、崖線、墳墓等の見学は、流水の多摩川合流をもってすべて終了した。この後、谷沢川を直角に曲がり等々力不動尊の森林に沿って道なりに歩いていき萬願寺・等々力不動尊（東京都世田谷区等々力）の正門の前に出た。



10図 等々力不動尊の門前

H30.08.05 T.O

最上川紀行 一米沢から鶴岡へ「奥の細道」を訪ねて一

五月雨をあつめて早し最上川

およそ 330 年前、元禄 2 年の 3 月下旬(新暦 5 月中旬)俳人松尾芭蕉は門人の河合曾良を伴って江戸深川を出立し、日光道中から奥州街道へと進む「奥の細道」への旅に出た。平泉に着いたのが 5 月半ば、そこから奥羽山脈を越えて出羽路に入る。そのときの様子を芭蕉は「三日風雨あれてよしなき山中に逗留す」と記しており、やっと辺境を越えた尾花沢では十日間という長逗留をしている。新庄から酒田への庄内街道は最上川に沿って西へ向かう脇街道で、庄内地方への通行は険しい山越えとなるので、その頃は古口と清川あたりで最上川の水路をとるしかなかった。芭蕉も「左右山おほひ茂みの中に船を下す」と古口のすこし上流にある本合海からこの最上川を舟で下っている。

最上川は、ほぼ山形県域を流れる 216 km にわたる東北有数の河川で、その源は山形県南部の西吾妻山に発し米沢盆地の水を集め、山形盆地、新庄盆地を過ぎ庄内



平野を貫流して酒田で日本海に注ぐ。そのため古くから舟運に利用されており、江戸時代には内陸と庄内平野を結ぶ幹線となり、米や紅花などが酒田に集められ、西廻り海運で大坂、江戸に廻送されていた。

もう十数年前のことになるろうか、その年は長梅雨で雨の日が続いていたが、初夏の一週間程、作家藤沢周平の故郷を訪ねて、米沢から鶴岡へ最上川に沿ってザックひとつ背負い気軽なひとり旅に出た。

初めて訪れた米沢は曇り空だったが、まだ雨にはなっていなかった。米沢は上杉 15 万石の城下町である。市中を流れる最上川を渡り、城址公園から歴代藩主の墓所である上杉家御廟所を訪ねる。作家藤沢周平の遺作となった長編「漆の実のみる国」は第十代藩主上杉治憲(のちの鷹山公)の半生を描いている。その夜は最上川源流にある山間のひなびた白布温泉に宿をとる。翌朝は夜来の雨が本降りとなり西吾妻山への登山はあきらめて山形に立ち寄り、芭蕉が「閑さや岩にしみ入蟬の声」と詠った山寺(立石寺)に詣でる。五大堂に立ち、雨の降るなか奥之院にのぼり「俳句は自分を支え導く一本の杖である」と句集に書き残した亡き父を偲ぶ。

翌日、連日の雨で増水した最上川の舟下りを楽しむ。昔、芭蕉が乗船した



という本合海から少し下流のかつて船番所があった古口から草薙まで 12 ㌔のいわゆる「最上川芭蕉ライン舟下り」である。あいにくの雨に乗り合う客は少ない。この辺りは最上峡といわれて両側に山が迫りその山峡を最上川が流れており、とうとうと流れる大河の趣があるが、連日の雨で増水した流れは意外に速い。豊かに流れる川面が所々波立って激しい水勢を感じる。「奥の細道」にもある仙人堂、白糸の滝を右に見て、舟を巧みに操り「エンヤコリヤマガセはやり風邪など引かねよに」と最上川舟唄をうたう船頭に雨に濡れた菅笠と蓑がよく似合う。

信仰の山出羽三山のひとつ羽黒山の麓にある宿坊で一夜を明かし出羽三山神社に詣でる。森閑とした杉林のなか国宝五重塔が風雪に耐えているかのようにひっそりと立つ。長く続く参道の途中、二の坂茶屋に立ち寄って名物の力餅を味わう。時折、激しく降る雨に 2446 段の長い石段を上ってくる人もない。6 月 3 日、最上川を下って羽黒山に着いた芭蕉は山内の南谷の別院に宿をとっている。今は、森林のなか堂宇は失せてそれを偲ぶ跡だけが残る。



羽黒山から月山（標高 1980 ㍎）へ向かう。深田久弥は名著「日本百名山」で一山は濃い群青で、牛の背のようにゆったりと伸びていたと描いているが、「奥の細道」

には一月山に登る。息絶へ身こごへて頂上に至れば日没して月あらはる一とあり、芭蕉は月山頂上で仮泊して湯殿山への険路を往復している。雨の出羽三山神社に詣で、とりあえず月山八合目まで登山バスで上ってみたが、やはり深い霧の中だった。弥陀ヶ原の湿原は濃霧で全く見通しがきかない。湯殿山へ縦走する予定だったが断念して下山する。露に濡れたニッコウキスゲの黄色い花が可憐に咲いていた。



鶴岡は作家藤沢周平が生まれ育った故郷である。庄内藩 13 万 8 千石の城下町で、藤沢文学の多くの作品の舞台となる「海坂藩」7 万石の城下町はここ鶴岡庄内がモデルとなっている。人通りの少ない雨の日の午後、「海坂藩」の面影を求めてひとり鶴岡市街を散策する。長編「蟬しぐれ」の主人公文四郎が歩いた道はどの辺りだろうか。その夜は湯田川温泉に宿をとる。

翌朝、激しい雨音で目が覚めた。鶴岡駅を発着する J R 各線が豪雨のため全て不通となっていた。仕方なく最上川河口の酒田行きはあきらめて、高速バスで山形に迂回して帰京することとした。

今回の旅行は雨に濡れた「奥の細道」を辿る旅となった。 [K-1]

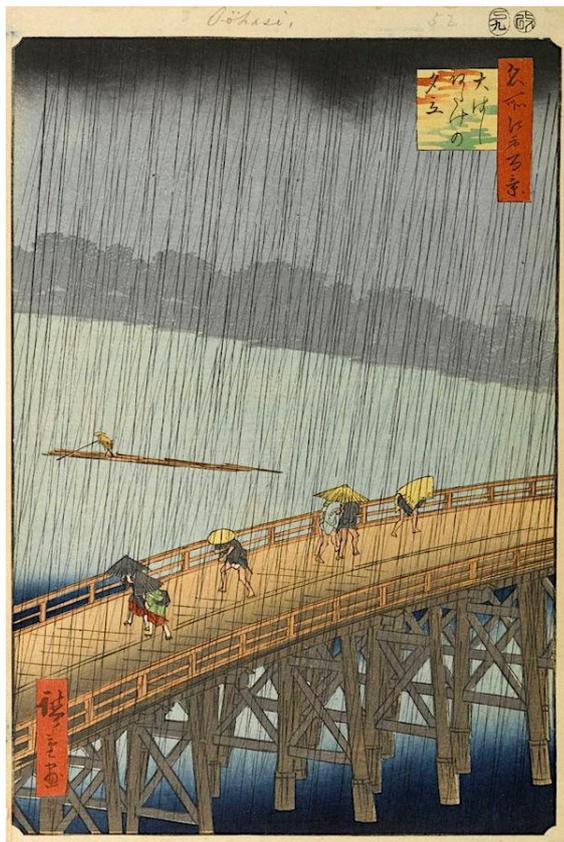
『黒い雨』

2011年、「ひこばえ広場」は世田谷区生涯大学34期福祉文化コース生の授業の一環、「シニア世代と幼児のつながりづくりの試み」として世田谷保育園との交流を始めた。

「ひこばえ遊びの広場」と名付け、毎月伝統遊びや工作、絵本、紙芝居などを準備し、月1回約1時間訪問している。毎年8月には「へいわのはなし」として戦争体験者のお話や関連絵本などを読んで平和の大切さを伝えている。

今年8月15日、4・5歳児は長崎での被爆体験者木村徳子さんのお話をお聞きした。

「自分の10歳の時の体験、これは思い出ではない。73年にわたった現在も、この先自分が生きている限りの体験であるということ。そしてそれは自分の子どもにも及ぶ、未来につながっていること。」を前提に写真などを見せながら話をされた。園児たちは真剣に聞いていて、手を挙げて質問する子もいた。



名所江戸百景 大はしあたけの夕立

歌川広重

1945年8月5日 広島に原爆投下

1945年8月9日 長崎に原爆投下

1966年、広島に原爆の様子を描いた井伏鱒二の小説『黒い雨』は新潮社より刊行され、第19回野間文芸賞を受賞した。「雷鳴をとどろかせる黒雲が市街の方から押し寄せて、降って来るのは万年筆ぐらいな太さの棒のような雨であった。真夏だというのに、ぞくぞくするほど寒かった。」

1986年、NHK特集「広島・長崎に奇妙な黒い雨が」でその謎に迫っている。

広島・長崎原爆は炸裂30分後、広大な区域に黒い雨を降らせた。その範囲は、全焼区域の100倍を超える広域に及んだという。実験では降らなかった黒い雨がどうして降ったのか？原爆炸裂後、きのこ雲が地上の火災の黒煙を吸い上げて巨大な黒い積乱雲となり風下に流れ史上空前の人工の雨を降らせたという。

1989年、今村昌平監督の映画『黒い雨』は公開された。井伏鱒二の小説『黒い雨』の映画化である。矢須子に扮した主演の田中好子の演技は高く評価され、公開翌年の第13回日本アカデミー賞で最優秀作品賞をはじめ数々の部門で受賞した。「Black Rain」という題名で英語圏でも上映された。

2011年、東日本大震災へのチャリティーライブ「斉藤和義 on USTREAM 『空に星が綺麗』」で斉藤和義がうたっている。

「教科書もCMも/言ってたよ安全です/
おれたちをだまして/言い訳は想定外/
なつかしいあの空/くすぐったい黒い雨/
ずっと嘘だったんだぜ/」

原発事故と、事故への政府の勝手な対応に憤り、あえて代表曲「ずっと好きだった」で、替え歌を作り怒りと悲しみとともに臨んだのであるという。1回目歌の途中でフリーズしたと止められた。回復後2回目を悪びれることなく歌い切った姿に心うたれた。

この先放射能入りの雨が降ることは未来永劫ない世界をと、こころから願っている。 Y.K

あめ 雨 雲 雪 川 水

インターネットで調べたら、雨の名前は百三四十もあるそうだ。そこで、雨について御託を並べようという望みは、早々に諦めてしまった。そして、雨やその変形である雪、雲、水について、思い出やら写真やらを載せて誤魔化すことにした。

あめのオソフリ

福島に住んでいた頃のこと、地元の人たちと一杯やりながら話をしていたところ「雨がオソフリになったからそろそろ帰っぺかない。」と言う人が出てきた。僕は、この「オソフリ」の意味が解らなかったので尋ねたら、小降りになったと言う意味だと教えてくれた。東京の下町しか知らない僕は、初めて福島に住んで、言葉や習慣の違いに戸惑い、或る意味面白いと思って馴染むことに努めた心算だが、地元の人たちは、一眼国の人々が二つ目人間を見るような感じで僕を見ていたのかもしれない。カンプラ食べるかと聞かれて返事ができなかったり、クタビレタと言って笑われたり、人を訪ねて行って「〇〇さんの家は何処ですか」と尋ねたら「この部落十何軒全部〇〇だ」といわれてひっくり返ったり、休みに郡山へ遊びに行った時は、翌日の訪問先で、「お前は昨日郡山の〇〇辺りを歩いていたろう」といわれて驚き、よく事情を聴いたところ、別の町の親戚が僕を見かけたのだそうで、その情報伝達の

速さに驚いたり、冬は泥鰯掘りに連れて行ってもらい、泥鰯汁をご馳走になったり、ホワイトアウトに遭遇したりで大変良い経験をした。当時の地元の方々には厚くお礼を申し上げる。

東京水と金町浄水場

東京大空襲で本所の家を焼かれてから、やっと落ち着いたのは葛飾区の亀有と言う処であった。この辺りは、金町浄水場の水が引かれている。当初は、この水も不味くはなかったが、経済が回復してきて、河川の汚染が目立って判るようになってからは、段々不味くなってきた。この頃は、多摩川が泡立って新聞沙汰になるし、隅田川は濁っているばかりではなくどぶの臭いがして、昔、寒中水泳をやっていた面影はまるっきりなくなってしまっていた。常磐線や総武線に乗って隅田川の近くへ来るとどぶ川の臭いがして、南千住へ来たなとか浅草橋へ来たなと分かったものである。金町浄水場の原水採取河川は江戸川だから水質の悪さは隅田川ほどではなかったが、それでも、水道水を汲んで飲もうとするとぷーんと臭うし、味も何とは言えず不味かった。厚生省が発足させた「おいしい水研究会」は、1986年には「日本一まずい水道水」と評したそうだ。

その後、原水の質も改善されたし、水の浄化技術も進んだ（今までの通常浄化処理に加え、オゾンを加えて臭い

の素になるものを分解した上で、生物活性炭吸着処理をしてある)ので、水道水も総体的に大変美味しくなり、今では塩素を加えていない水を350mlと500mlのペットボトルに詰め、「東京水」と名付けて売り出しているほど美味しくなった。今は、「近代水道百選」に選ばれているようだ。めでたし、めでたし。

因みに、世田谷区の水道水は、荒川水系の朝霞浄水場の水がメインで、一部金町浄水場からの水も大蔵地区でブレンドして供給しているようだ。

そのようなわけで、我が家では、美味しくなった水道水をそのまま使っている。台所の蛇口には水の浄化装置がついているが、其れは使わない。ペットボトル入りの水も買ったことはない。

世田谷の雲

雨はなかなか写真にはならないので、我が家から見た雲の写真の一部を載せて見る。

入道雲



この方向に東京湾があるためか、立派な入道雲は、なかなか見当たらない

2012. 09. 09.

環八雲



本当の環八雲かは知らない。 2012. 08. 05.

いわし雲



日の出前 2010. 10. 08.

二重の虹



夕方 2015. 09. 09.

2018. 10. 16. K. K.

春雨、梅雨、雷雨、時雨、霽

大気中の水蒸気が凝結して小さな水滴(雲粒)となり、それが成長して大きくなり地表面まで落ちてきたものが雨である。

雨水の源となる、海、湖、池、沼、河の地表面亦は動植物の表皮から蒸発した、水分が水蒸気化し空気に混って、水蒸気が上昇気流によって上空に運ばれると雨雲となり、季節によっては、雨や雹、霽、雪になって地上に降る。

雨にも幾つかの降りかたがあるようです、一つは、霧雨は雨滴が細かく降るので大気の層が安定している、層状の雲から煙るように降る小雨、細雨。

二つは、驟雨は大粒の雨が激しく降ったり小粒になって猛烈に降ったりする、対流雲(積乱雲)は夏に多い雷雨や、豪雨。

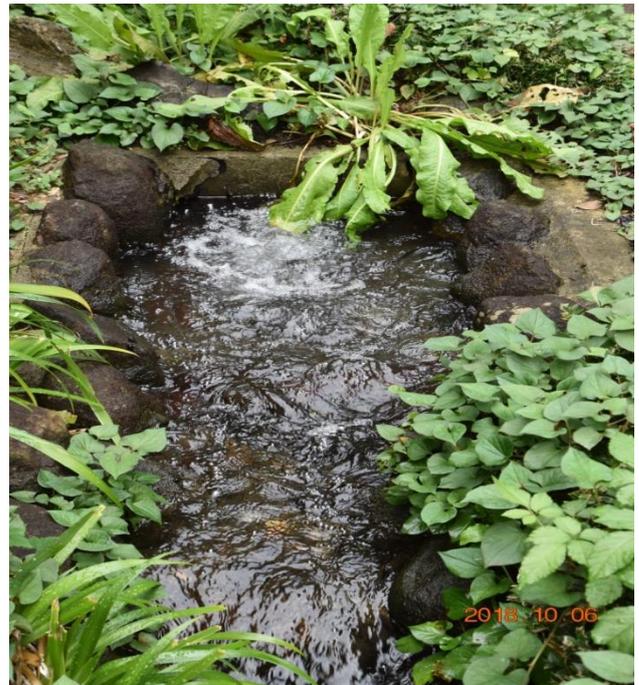
雨水は、生命の持つ生物の生存に欠かす事のできない物質である、人類も生活文化や農業、工業も自然の恵みを受け発展してきました。農地に日照りが続くと、雨乞いをする、雨が降り過ぎれば鎮まる神に祈ると云う、風習は日本に限らず世界各地で行われたようです。人類に稲作は重要な穀類で雨や雪を{水神}を古来から深い信仰をしていた。

窪地や岩盤の隙間から湧き出る湧水で、東京都内にも大量に湧き出す泉に、水神社を祀ってある湧水地は沢山あります。

世田谷区内にも多くの湧水が保護されている、昔は生活用水や農業用水に利用されていた。区内には約100箇所の湧水が有るようで、23区内では約280箇所ある。



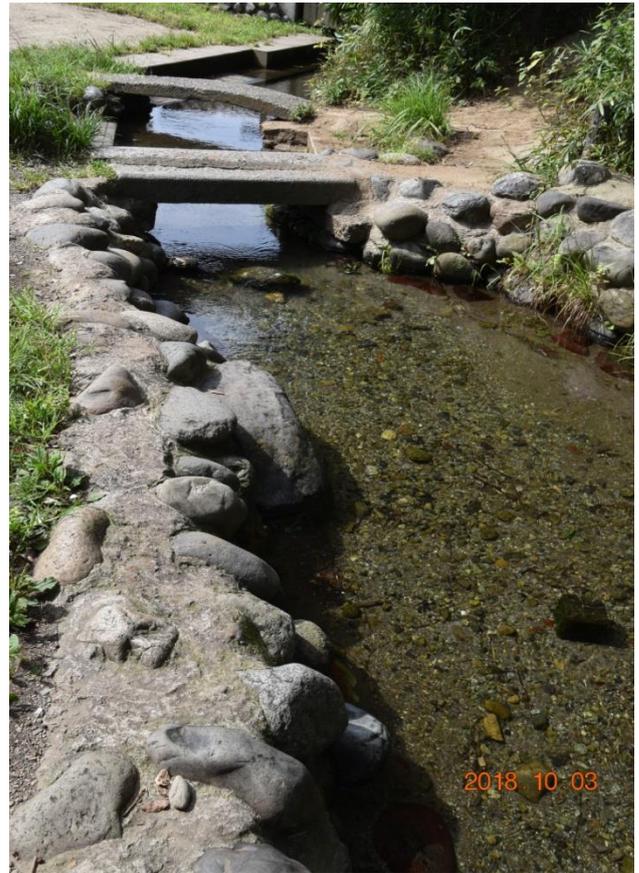
国分寺崖線に沿う成城湧水喜多見不動池



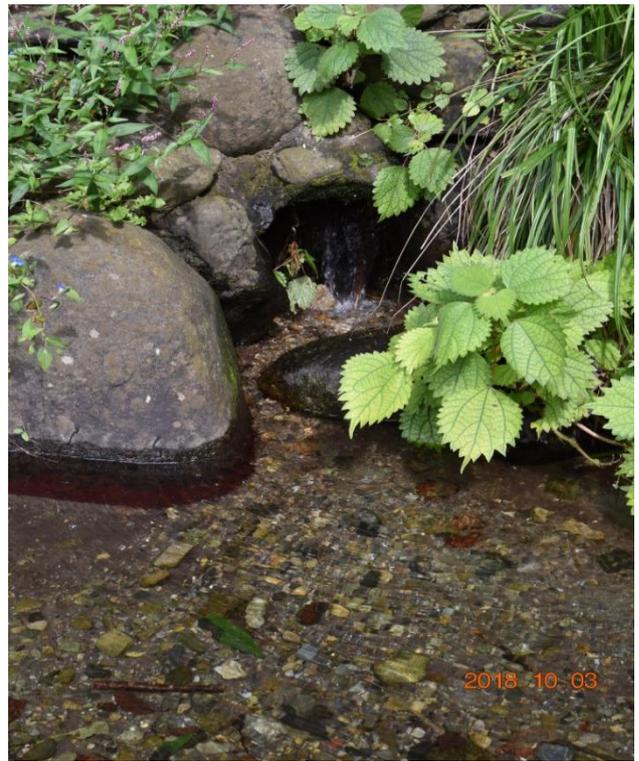
自然林のある地下から湧く泉神明の森みつ池



武蔵野国分寺崖線大地から湧きだす湧水群の流れ
下る緑豊かで生物の多い河川成城野川



ママ下湧水群は都内でも有数の湧出量誇る青柳崖線代表する水源多摩川に合流





雨のなか校舎へ急ぐ学童の傘もカラフル



武蔵野国分寺市国分寺崖線地下から湧き出る豊かな水量の湧水群



湧水も大河となって岩盤を削りとられた滝壺で悠々と泳ぐ黄金の鯉、不動の滝



お鷹の道湧水に真姿の池、湧水が集まり野川の源流で蜚も飛び交う清水川、環境省の名水百選にも選ばれている



不動滝から流れ下る清流川に山女、岩魚、鮎、ニジマス等、泳ぐ姿も見る事ができる